【論　説】

「アメリカン・ドリーム」は死んだのか
―― 格差社会原点からの歴史的考察[1] ――

砂　田　恵理加

目　次

はじめに
1 「私には夢がある」：アメリカの夢とは何か
2 アメリカ格差社会の原点？：金ぴか時代
3 夢を支えたもの
4 「アメリカン・ドリーム」は死んだのか

はじめに

「格差」という語が単なる差を指すだけではなく，経済的な隔たりを意味し，しかもその差が対処されるべき社会問題であるという特定のニュアンスをもって使われだすようになって，10年はたつと言われている[2]。世界各地の格差について日本でも議論されてきたが，この語が英語で何なのかあらためて考えてみると，意外なほど適語が出てこないことに気づかされる。「格差」と和英辞書で引けば，disparityが最初に出てくるのであろうが，この語が日本語の「格差」ほどの特定のニュアンスを伴ってアメリカで使われている様子はない。実のところ，Disparityは「不均衡」を指す言葉ではあるが，必ずしも経済的なアンバランスのみを意味するものではなく，この一語だけでは何が不釣り合いなのかまでは，はっきりしない。経済的な不均衡を英語で言い表すなら，income gap, economic inequality, social polarization, the gap between rich and poorなどと表現できるが，どれも日本語の「格差」の語ほど決まった形で使われることはないようだ。考えてみれば，日本でも社会問題としての「格差」が広く

認知されるのに一役買った，アメリカ人経済学者，ポール・クルーグマンの『格差は作られた：保守派がアメリカを支配し続けるための呆れた戦略』でさえも，原題は *The Conscience of a Liberal*，すなわち「リベラルの良心」であり，「格差」に相当する語は使われていないのである(3)。

後述するように，近年，所有資産や所得の面でアメリカにおける経済的な格差が開いてきていることは事実であるし，これを社会問題と受け止めている人も多いという点では日米で変わりはない。しかし，それ自体に対応・解決しなければならない課題だというニュアンスを持つ日本における格差とアメリカのそれとでは，一定の距離があるようにも見える。それを英語では単語ひとつで表す事ができないという，言語の微妙なずれが暗示しているかのように，「格差」には日米の間で前提となっている認識の相違があるようだ。

本稿では，格差をめぐるアメリカの言説を歴史的に見ていくことで，現在のアメリカの経済格差の何が問題であり，それがアメリカ社会の何を語るものであるのかについて考察する。数字や統計のみからは見えにくい，経済的成功と失敗の物語について歴史的にふりかえりながら，分析していく。経済格差は，それそのものが是正されるべき社会問題としてとらえられるが，アメリカにおいては格差が広がるのと同時にその差が固定化されつつあること，その中で勤勉に働き今より良い暮らしを手に入れるという「アメリカン・ドリーム」が説得力を失い，人々がこの理念から断絶感をおぼえていることが最大の問題である事を指摘していきたい。

1 「私には夢がある」：アメリカの夢とは何か

Let us not wallow in the valley of despair, I say to you today, my friends - so even though we face the difficulties of today and tomorrow, I still have a dream. It is a dream deeply rooted in the American dream. I have a dream that one day this nation will rise up and live out the true meaning of its creed: "We hold these truths to be self-evident, that all men are created equal." (4)

--Martin Luther King, Jr., 1963.

学科としてのアメリカ史の比重が大きいとは言えない日本の歴史教育を受けて育った人でも，マーティン・ルーサー・キング Jr.（Martin Luther King, Jr.: 1929-1968）の「私には夢がある」演説については知っているだろう。日本では長年，中学校の英語の教科書に使われているために，むしろ原文タイトルである “I Have a Dream” の方が良く知られているかもしれない(5)。しかし，この歴史的名演説でキングが語った夢の本質が何だったのかと改めて問われると，その理解は一面的なものになっているのではないだろうか。

キングは，1950年代から60年代にかけてのアメリカ公民権運動のリーダーとして知られ，その志半ばにして凶弾に倒れることで，同時代のケネディ大統領と共に，アメリカの伝説のひとつとなった。「神の王国が地上に降りたかのようだった」と評されたほど人々を熱狂させたこのI Have a Dreamスピーチは，そのようなキングのキャリアおよび20世紀の公民権運動の頂点と見なされている(6)。この演説自体が達成とされ，あまりに有名であるがために，人種平等の理想を高らかに謳いあげたこと以外の意味をここに見いだすことは，むしろ難いようにも思える(7)。しかしこれが，いつどこで，誰に向かって語られたのかという文脈を見直した時，ここで語られた「夢」のもうひとつの側面が見えてくる。

“I Have a Dream” は，1963年8月28日，「ワシントン大行進」の際に行われた演説であることが，一般に良く知られている。「ワシントン大行進」は，人種差別撤廃を目指す運動が全米に広まりつつある中，「公民権運動の支持者が一堂に会して，運動の気運を盛り上げる」とともに「連邦政府に圧力をかけて何らかの対策を講じさせる」こと目的に行われたデモンストレーションだった(8)。しかし，このデモがどのように企画されたのかを振り返ってみると，これが公民権運動の盛り上がりの中で突如企画されたものではないことが分かる。行進を呼びかけたのは，1940年代から労働運動および黒人運動の指導的役割を担ってきたA・フィリップ・ランドルフ（Asa Philip Randolph: 1889-1979）であり，この大行進の正式なイベント名前はMarch on Washington for Jobs and Freedom, すなわち「職と自由のためのワシントン行進」であった。

一般的にはこれが公民権運動の，黒人運動のクライマックスであると記憶されているがために，このデモが人種平等を担保するものとして求めたものが「自由」だけではなく「職」であったこと，すなわち経済的機会の平等だったという側面は見落とされがちである。この点を確認し，改めてキングのI Have a Dreamスピーチを聞けば，キングの言う「夢」は新しい響きをもって聞こえてくるのではないだろうか。

この演説の中で，キングは「私のとある夢」とは，「アメリカン・ドリーム」に立脚をしたものであると述べる。キングによれば彼の夢は，「すべての人間は平等に作られているという事を，自明の真理であると考える」とアメリカ独立宣言に謳われた「アメリカの信条」を，白人黒人に関わらずアメリカ国民全員に実現させ，人々がそれに沿って生きていくことができる社会の達成である。同スピーチの中でキングは，この夢が立脚する独立宣言のアメリカの信条を「約束手形」（a promissory note）に例え，これが黒人にだけ「残高不足」（insufficient funds）で不渡りになっていると説明する。しかしアメリカの「正義の銀行」（the bank of justice），そして「この国の機会に満ち溢れた金庫」（in the great vaults of opportunity of this nation）は決して資金不足などではなく，キングらはこのアメリカの小切手を「換金するために」首都ワシントンに来ているのだと主張する[9]。キングがここで訴えた人種平等が，経済的な利得が強く意識されたものだったことが，こうしたレトリックからも分かるだろう。キングのI Have a Dream演説は，あまりに有名なそのクライマックス部分だけを聞けば，自由と人種平等といった，ともすると醜い現実から浮遊した理想を謳いあげたもののように見えるが，全体を通してみると，世俗的な経済的機会均等の実現を目指すもでもあることが理解できるのだ。

I Have a Dreamスピーチで述べられた「夢」は，そのフレーズだけを見れば，それを抱く「私」，――つまりすでに時の人であったキング――という主体者が明示され，冠詞のaをともなう，「あるひとつの」という漠然とした提示のされかたをしているがために，キング自身の個人的なものであるかのような印象を受けがちである。しかしスピーチ全体を聞けば，それはむしろアメリカが

アメリカ合衆国として成立する以前から理念として掲げ，やがては「アメリカン・ドリーム」と名付けられた，アメリカ人の集合的な夢であることが見えてくる。そのことに気づいた時，I Have a Dream スピーチは，アメリカの夢を追い求めた大勢の人々ひとりひとりの「私」の語りが織りなす，壮大なアメリカの物語として共鳴をはじめる。

それではこの「アメリカの夢」とは何なのだろうか。「アメリカン・ドリーム」という言葉が広く使われるようになるきっかけを作ったとされる作家のジェームス・トルスロー・アダムス（James Truslow Adams: 1878-1949）は，1931年の著作『アメリカの叙事詩』（*Epic of America*）で，これを「すべての階級のアメリカ人」が抱くことができる「より良い，そしてより豊かで幸せな生活」（a better, richer, and happier life）という夢であり，この国の「最初から一貫して存在してきた」ものだとしている(10)。それはただ単に，「自動車と高給」を手に入れることを意味しているわけではなく，「生来は不可能な段階におのおのが到達でき，あるがままの自分として他人に認めてもらえる社会組織」への期待である(11)。日本ではしばしば「アメリカン・ドリーム」という言葉が，裸一貫から大金持ちになるといった極端な経済上昇の成功物語に言及する際に使われるのに対し，「より良い」「より豊かな」緩やかな上昇志向と，それに伴う承認欲求の充足を示す，人生が良くなっていくという期待感を支える言葉として使われてきたことが分かるだろう。

また，この「アメリカン・ドリーム」という言葉や概念が，1972年大統領戦のスピーチ等のレトリックでいかに使われてきたかを分析したウォルター・フィッシャーの研究によれば，この語には「物質的神話」（materialistic myth）と「道徳的神話」（moralistic myth）という2面性があるとされている(12)。フィッシャーはここで，神話は人々が共有する夢であり，夢は個人的な神話であるという，ジョセフ・キャンベルの説を引き，「神話」という言葉を「夢」とほぼ同じ意味合いで使っている。フィッシャーの言う「物質的神話」，あるいは「アメリカン・ドリーム」の物質的側面は，まさに個人の経済的成功の物語である。ピューリタン的な倫理感に支えられた勤勉性と努力，自主自立

の精神に裏打ちされたそれは，規制とコントロールを嫌い，自由企業システムを重んじ，富や権力といった自己の利益追求を求めるものだ。これと対を成すもうひとつの「道徳的神話」は，全ての人間が平等に作られ，生命，自由，幸福の追求をする権利が等しく与えられているという，平等性を強調する建国の理念に支えられている。自分の利益と成果のみを追い求めがちな物質的側面とは異なり，寛容性，同じ人間への共感や思いやり，個人個人の尊厳と価値を重んじ，物質的により恵まれない人々へ利益還元しようとする態度を生む(13)。

この「物質的」「道徳的」2 面性は必ずしも相反するものではなく，相互補完的に支え合うものである。どちらかのみが強調されすぎたり，力を失ったりすれば，アメリカのアイデンティティを支えてきた，「アメリカン・ドリーム」の物語全体が説得力を失うものと理解できる。ふたたび I Have a Dream の演説に戻れば，キングの夢は，人種平等を求める道徳的な夢でありつつ，肌の色に関係なくまともな仕事と経済的安定を求める物質的夢の一環でもあったという点で，まさしく「アメリカン・ドリーム」だと言える。

それではこの「アメリカン・ドリーム」は，アメリカの格差とどのような関係を築いてきたのだろうか。次節で歴史的に検証していく。

2　アメリカ格差社会の原点？：金ぴか時代

格差の是正を求める動きとして広くマスコミに取り上げられた Occupy Movement が始まったのは，2011 年 9 月のことであった。アメリカの富の象徴であるウォール街でデモ活動を行った人々が，上位わずか 1%の人々が莫大な富を掌握している現状を批判し，“We are the 99%” つまり「私たちは（裕福な上位 1%以外の）99%だ」をスローガンとしたことは記憶に新しい(14)。しかしこの 1%の金持ち対それ以外の 99%という極端な富の不均衡は，アメリカ史において特殊なことだったのだろうか。一般的にアメリカ史において経済格差が著しく開いた時代として知られるのは，19 世紀末の the Gilded Age，すなわち「金ぴか（金メッキ）時代」と呼ばれる南北戦争後の 30 年ほどの間のこ

とである。内乱が落ち着き，ひとつの国としての統合がすすんだアメリカ社会では，北部を中心に技術革新や産業の発達と共に大企業の独占が進み，経済格差が著しく開いた。豊かさと平和を謳歌する真の黄金時代ではなく，うわべだけを飾りたてた「金ぴか」であると揶揄する言葉からも推察されるように，一部の新興経済エリートが富と権力を掌握し政治腐敗がすすむ一方，社会のどの層の人々も拝金主義的になり経済利益を追い求めた時代だったとされている(15)。先述のクルーグマンは，経済分析の観点からこの一種のバブル期を1870年代終わりごろから1920年代くらいまでの50年間ほどと，一般的な時代区分よりも幅広くとり，「歴史家の不評を買うことを承知の上で」，「長期の金ぴか時代」（the Long Gilded Age）と名づけている(16)。通常史学の視点からは，南北戦争後に始まった「金ぴか時代」は，1890年代には社会腐敗に嫌気のさした人々が社会浄化プロジェクトを推し進めるようなり「革新主義の時代」（the Progressive Era）へとうつり，第一次戦争後から株価大暴落が始まるまでは，人々が消費と享楽に走る「狂乱の20年代」（the Roaring Twenties）であったとの説明がされてきたが，クルーグマンはこれらの時代を通して経済格差が開きつづけたことに着目し，こう指摘したのだ。

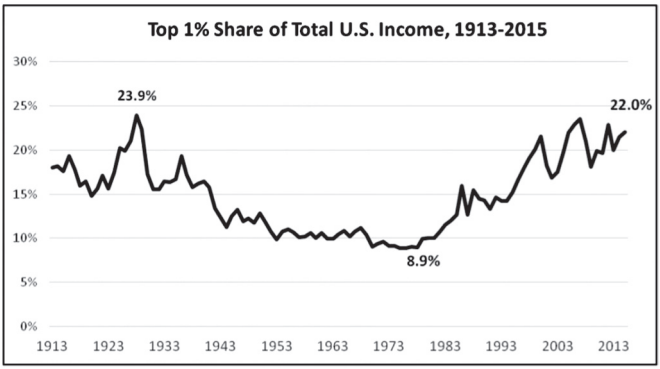
この「金ぴか時代」の格差を，「金持ちがこれほどたくさん金を持ち，貧しい人々がこれほど貧しかったことはかつてなかった」と，当時の生活状況の研究で知られるオットー・ベットマンは説明する(17)。この時期に成功した富豪の中には，石油精製業のジョン・ロックフェラー，鉄道業のコーネリアス・ヴァンダービルト，鉄鋼業のアンドリュー・カーネギーなど，現在でもその名を知られる錚々たる企業家が含まれている。**【表1】**にまとめたように，CNNの2014年の記事によると，史上最も裕福なアメリカ人のランキングでは，先述のロックフェラーが逝去時の資産の大きさの面で1位であり，12位以内の企業家のうち少なくとも7名が金ぴか時代に財を成している。それ以外の，産業が大きく発達する以前の金ぴか時代より前に財を成した人物の子弟の多くが先代の事業を引き継いでいることを考えると，ランキング入りしている顔ぶれのほぼすべてが，金ぴか時代のアメリカ財界に大きな影響を及ぼしている。そ

	名前　生没年	資産（$）*	従事した産業
1	John D. Rockefeller　1839-1937	$2530 億	石油精製
2	Cornelius Vanderbilt　1794-1877	$2050 億	船舶，鉄道
3	John Jacob Astor　1763-1848	$1380 億	不動産
4	Stephen Girard　1750-1831	$1200 億	船舶，運輸
5	Richard Mellon　1858-1933	$1030 億	銀行
6	Andrew Carnegie　1835-1919	$1010 億（同位）	鉄鋼
7	Stephen Van Rensselaer　1764-1839	$1010 億（同位）	地主
8	Alexander Turney Stewart　1803-1876	$1000 億	紡績，小売
9	Frederick Weyerhäuser　1834-1914	$912 億	材木，林業
10	Jay Gould　1836-1892	$783 億	鉄道
11	Marshall Field　1834-1906	$750 億	百貨店経営
12	William Henry Gates III　1955- 現在	$740 億	ソフトウェア

【表 1】 Steve Hargreaves, “the Richest Americans in History,” CNN, Money, June 2, 2014 より作成。<https://money.cnn.com/gallery/luxury/2014/06/01/richest-americans-in-history/index. html>, last accessed 2018/10/27.　* 現代の資産価値に換算した値

の一方で 20 世紀生まれでは，マイクロソフト社創設のビル・ゲイツがやっと 12 位に入るばかりである[18]。さまざまなランキングで，世界で最も多くの資産を持とされるゲイツとの比較からも，金ぴか時代当時の資産家による富の蓄積が，いかに莫大なものであったかが分かるだろう。

こうした富の一局集中は，株価が大暴落して恐慌が始まる直前の 1929 年ごろまで続いた。**【グラフ 1】**からも分かるように，2013 年時点で，上位 1%の高所得者の所得の割合はアメリカの総収入を 100 とした場合の 22%を占め，株価暴落の前の好景気に沸く 1920 年代の最高値 23.9%とさほど変わらない値になっている。現代の経済格差がしばしばこの「金ぴか時代」と比較され，折に触れて「新しい金ぴか時代」と呼ばれることがあることからも，この時代こそがアメリカにおける格差社会の原点であると考えられる[19]。一見現代的な問題であるかのように見えるアメリカの格差は，アメリカ史上決して目新しいものではないことが分かるだろう。



【グラフ 1】 “Income Equality,” Equality org, <https://inequality.org/facts/income-inequality/>, last accessed 2018/10/27.

3　アメリカの夢を支えたもの

「金ぴか時代」の産業や都市の発展はホワイトカラーの中産階級層の形成を促進したが，全体に占めたその割合は，まだ決して大きくはなかった。絶対的多数を占めた世紀転換期の貧しい者の多くは，南欧や東欧からやってきた移民労働者であり，目まぐるしく発展するアメリカの工業を低賃金で支えたが，彼らが都市部のスラム街から抜け出せる目算は高くなかった。雇用者と被雇用者との間に実際どれくらいの格差があったのか，【表 1】のランキングで 11 位に入ったマーシャル・フィールドの経営する百貨店を例に考えてみよう。当時，百貨店の売り子の職は採用の際にマナーや言葉遣い，清潔な服装などが厳しく審査され，長時間立ちっぱなしで一般的には低賃金ではあったが，他の手工業の職などよりも上品な仕事と理解されており，特に若い女性たちに人気があった(20)。こうした「良い」仕事に就くことができた売り子たちは，週に 3 ドルから 5 ドルの給金を得ていたとされる(21)。その一方で百貨店オーナーであり，こうした売り子たちの雇用主であるフィールドは，時給に換算すると当時で 600 ドルの収入を得ていたという。売り子たちにとっては，雇用主の 1 時間あたりの給金と同じだけ稼ぐのに，3 年程度かかるほどの収入格差があった計算になる(22)。

ではこの元祖金ぴか時代に，こうした著しい経済格差はどのように受け止められていたのだろうか。当時，労使対立はかつてないほど激しくなったが，アメリカにおける労働運動は基本的には経済的要求に終始してきたと言われており，社会構造そのものを正そうとする革命性や政治性を帯びることは少なかった(23)。しかし，こうした大きな経済格差に社会的な不正義を見出し，これを正すべきだと主張した人々が一定数いたことは確かである。たとえばフォトジャーナリストの先駆けと言われるデンマーク出身のジェイコブ・リース（Jacob Riis: 1849-1914）が『もう一つの半分はどのように生きているか』（*How the Other Half Lives: Studies among the Tenements of New York*: 1890）で告発した，ニューヨーク市のスラム街に住む移民労働者の劣悪な生活環境は（**【図 1】**），教養ある善意の人々，特に当時の中産階級層に衝撃をもたらし，貧困地域の整備へとつながっていった(24)。リースが時の大統領セオドア・ルーズベルトと親交を深め，やがて社会のさまざまな不正や汚染を浄化しようという傾向の強くなる，「革新主義の時代」へとつながる社会改革の一端を担ったことからも，当時からも貧しさを解決すべき問題ととらえ，そこに救済の手を差し伸べよう

【図 1】 街角で眠るホームレスの少年たち Jabob Riis, “Street Arabs in Night Quarters,” Chapter 23, *How the Other Half Lives*, 1890. <https://www.historyonthenet.com/authentichistory/1898-1913/2-progressivism/2-riis/chap23.html>, last accessed 2018/10/28.

という動きがあったことには間違いない。

ただし当時，その救済の根拠となる問題意識や危機感が，今日のそれと同じだったかどうだったかというと，おそらくはちがっただろうと言わざるを得ない。当時多くの場合，「貧しさ」は，より恵まれた人々，すなわち当時少数派だった教養ある白人中産階級層の改革の担い手たちから，宗教的なモラルの危機の問題だととらえられていた。当時の改革者たちの関心は，最低賃金をあげることや，基本的な人権を守るためにセイフティネットを確保したり労働時間の制限を設けたりすることよりも，「もう一つの半分」の恵まれない人々に善意の施しを与え，社会を正しく浄化することに傾きがちだった。それはしばしば，アメリカの中心を担ってきたとされるイギリス系白人プロテスタントの価値観や伝統以外のものを否定することにもつながった。1920年に禁酒法が制定されたのも，そうしたプロテスタント的な神の元での社会改革の精神からだった。

それではこの時代のアメリカで，改革の対象とされた当の貧しい労働者たちは何を思っていたのか。アメリカは民主主義の国であり，少なくとも白人の男性たちには，どんなに貧しくても，たとえ読み書きができなくても，1830年代には普通選挙権が与えられ，投票行動を通じて富の再配分を求める政治的な声を上げることができたはずである(25)。しかし最初の共和党大統領となった第15代大統領リンカン（在職：1861-1865）以降，大不況の中ニューディールを掲げて当選した第32代FDルーズベルト大統領（在職：1933-1945）が登場するまで，相対的にはビジネスの擁護者である共和党が政党政治の中で優位を保った。

この時期の民主党に労働者階級からの支持が集約しなかった理由について，様々な方向から説明がされてきた。まず，論理上は成人白人男子に普通選挙権が認められていたとしても，実際には当時の貧しい労働者たちの多くは投票できなかったことが指摘できる。1910年ごろ，ほぼ14パーセントの成人男性は，まだアメリカの市民権を持たない移民だった。また南部黒人は南北戦争後間もなく，少なくとも1870年代末には公民権を剥奪されており，実際には投票できなかった。合わせると，当時のアメリカ人口の4分の1の，もっとも貧しい労働者階級の人々が投票行動を通じて政治的意見を表明することができな

かったのだ[26]。また，当時まだ数の多かった農民が地域的関心の相違から政治的に一つの勢力としてまとまることができなかったこと，農民と都市労働者とが連携することができなかった点も指摘できる[27]。

さらに，文化的・理念的方向からの説明も可能であろう。アメリカは歴史を通じて経済的な成功者に対する態度が概して好意的だということが指摘されてきた。特に「金ぴか時代」は社会のどの層においても拝金主義的傾向が強くなり，経済的成功者に対する好意と賞賛が高まった。これは，「富裕層とビジネスの党である共和党を一般に有利に」したと言える[28]。政治学者のルイス・ハーツが，その名著『アメリカ自由主義の伝統』で論じたように，保守的な自由主義者たちは，貧しい人々に「アメリカの夢」，すなわち資本家となるヴィジョンを抱かせることにより，自由経済と小さな政府への支持を勝ち取ることができた[29]。アメリカが貧者にも将来の成功を約束する社会であることを信じさせることで，体制への支持をとりつけたのである。

このような「アメリカの夢」の理念は，アメリカの精神文化の中で大きな存在感を放ち続けている。金ぴか時代に書かれ，その後のアメリカ社会で広く読まれ続けたホレイショ・アルジャー（Horatio Alger: 1832-1899）による小説，『ぼろ着のディック』（*Ragged Dick*: 1868）およびそのシリーズは，まさにこの「アメリカの夢」の物語だと言える。この話の中で，両親に死に別れ，ニューヨークの街角で寝泊まりするホームレスの靴磨きの主人公ディック少年（まさに【図 1】の少年たちを髣髴とさせる）は，ある人物との出会いをきっかけに勤勉に働き倹約に努めるようになり，一種の運にも助けられて，立身出世をしていく[30]。無一文から経済的成功を勝ち得る，いわゆる「ぼろ着から金持ちへ」（Rags to Riches）物語の典型だったディックの物語が大きな人気を博したため，アルジャーはその後 100 を超える続編，あるいはこれと同テーマの小説を次々と出版している[31]。本稿第 2 節の【表 1】のリストで名前の挙がった企業家たちの多くが現実の成功者として憧れを集める中，フィクションの世界でも成功物語が愛されたのである。実際の成功者の中で言えば，特にロックフェラーや，ヴァンダービルト，カーネギーは，貧しい家庭に生まれたものの，幼いころか

ら勤勉に働き，成功を収めたという点で，14歳とされているディック少年同様，アメリカン・ヒーローとされた。彼らは成功することによって，アメリカの夢を体現しただけではなく，アメリカという国が，貧者の夢をかなえられる，すばらしい場所であることを証明することで，アメリカの伝説を強化したのである。

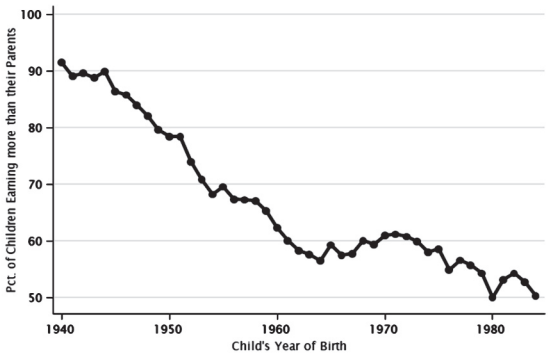
単純化を恐れずに言えば，金ぴか時代，金持ちも貧しい労働者も，さらなる経済的成功をめざす夢を抱き，それを実現させる国としてのアメリカに信頼を寄せていたという点では同じだった。こうした状況を指し先述のハーツは，共和党に連なる保守的な自由主義者たちが，アルジャーの世界観に「壮大で名誉ある『アメリカニズム』のラベル」を貼り，労働者たちを「富の夢で魅了した」と指摘している(32)。貧しくとも，この「富の夢」，成功の夢に惹かれ，自分の階級的利益を度外視し，資本主義の擁護者の党を資本家と共に支えることもあり得たのだ。

4　「アメリカン・ドリーム」は死んだのか

それでは，歴史的に見れば大きな経済格差が存在することが必ずしも特異な状況ではなく，むしろ人々を社会的上昇へとかきたてるインセンティヴにさえなっていたアメリカ社会において，現在の格差の問題の核となっているのは何なのだろうか。現代社会の格差と，金ぴか時代の格差とを比較した際，最も異なるのは1930年代に「アメリカン・ドリーム」と名付けられた「富の夢」に対する人々の態度であるように見える。これまで数々の学者やジャーナリストが，現代のアメリカ社会では「アメリカン・ドリーム」が色あせ，破壊されつつある可能性を指摘してきた(33)。ギャロップ社による調査では，「アメリカでは経済的な機会が十分確保できている」と答えた人は，2013年，52％と過半数を上回っており，「アメリカン・ドリーム」の神話はいまだ有効であるように見える。しかし1998年の時点で同様の回答をした割合は実に81％にのぼっており，その後年を経るごとにその割合が減少しいっていることを考えると，近年，「夢」への信頼が急速に揺らいでいっていることに間違いはないようだ。

逆に「経済的な機会が開かれていない」と答えた人の割合は1998年の17%から2013年の43%へと，急激にその数を伸ばしている(34)。この調査結果を受けギャロップは，多くのアメリカ人にとって，「無限の経済的機会というアメリカン・ドリームを支える重要な要素は，アメリカ社会とは相いれないものとなっているようだ（seems strangely foreign）」と結論づけた。

「アメリカン・ドリーム」が幻想に近づきつつあることは，**【グラフ2】**のハーバード大学のラージ・チェティ（Raji Chetty）を中心とする政策提言研究所，Opportunity Insightsのデータからも読み取れる。これによると，1940年に生まれたアメリカ人の子供が成人したのち，親より良い生活をおくることができる可能性は90%だった。この数字は多少の上下はあるものの，全体としては年を経るごとに下がっていき，1980年生まれでは50%前後まで落ち込んでいる。「アメリカン・ドリーム」の定義でもある「より良い，そしてより豊かで幸せな生活」の実感として，親の世代よりより良い暮らしができることがひとつの指針だとすると，その達成の可能性が急速に失われていったことが分かる。また，他国との比較で考えた場合，アメリカ全土で下位20%の収入の家庭に生まれた子供が上位20%の収入を得るようになる可能性は7.5%程度で，



【グラフ2】 Opportunity Insights, <https://opportunityinsights.org/national_trends/>, last accessed 2018/11/02

これはカナダやデンマークの13～13.5％の可能性と比べると約半分でしかない[35]。いまや，「アメリカン・ドリーム」よりも「カナディアン・ドリーム」方が達成の可能性が高いのだ。経済的に成功するという「アメリカン・ドリーム」の物質的神話は，世代的にも他国と比べても急速に実現の可能性が低いものとなっていることが分かるだろう。

『ぼろ着のディック』に見られるように，金ぴか時代には貧しさが立身出世の前提であったのに対し，現代の格差社会ではそのような語りは多いようではないし，むしろ「夢」が壊れつつあること，ともすれば死んでいくことの方に焦点があてられている[36]。この違いに，どのような意味があるのだろうか。数値からのみでは見えてこない，「夢」に対するアメリカ人の姿勢の変化を，現代の貧しい白人労働者コミュニティの実態を描いたと高く評された『ヒルビリー・エレジー』（*Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*）から考えていきたい[37]。

Hillbilly Elegy，すなわち「田舎者の哀歌」は，アメリカで「錆びついた工業地帯」（the Rust Belt）と呼ばれる，地元の製造産業が斜陽となった中西部オハイオ州の貧しい地域に生まれ育った著者が自らの生い立ちを語ったメモワールである。ドナルド・トランプを大統領当選に導いたとされる貧しい白人労働者層が直面する厳しい現実を描いたことが評価され，2016年に出版されると即座に全米で話題となった。邦訳のタイトルは『ヒルビリー・エレジー：アメリカの繁栄から取り残された白人たち』であるが，この副題は本書の一側面しか表していないように見える。確かに著者であるヴァンスの生い立ちは，貧しさのみならず幼いころから繰り返される母親の離婚と再婚，それに伴う引っ越しと離別，薬物依存，家庭内外での身体的精神的暴力の影響を受け，非常に安定しないものであった。しかしヴァンスはこの恵まれない環境の中で，祖父母の経済的・情緒的なサポートを受け，海兵隊勤務の後地元のオハイオ大学を卒業し，さらに名門イェール大学のロースクールに学び弁護士となり，「アメリカン・ドリーム」を達成したことを実感している[38]。また本書の中心的な登場人物であり，実質的に彼の両親の役割を果たした母方の祖父母も，第二次大戦後の

アメリカの産業の発展と，ニューディール期に導入された平等化を図る経済政策の大きな恩恵を受けている。ケンタッキー州の炭鉱町に生まれ無学で貧しかった祖父は，オハイオに出てきて大きな鉄鋼企業に職を得て，故郷の人々には想像もつかないほどの給料をもらい，家を買い，3人の子どもを育て，アメリカの「典型的な中流層」になった(39)。ヴァンス家の中で，1929年に生まれた祖父と，1984年に生まれた著者が「アメリカン・ドリーム」をそれぞれの形で達成したとすると，邦題にある通り「取り残され」てしまったのは1961年生まれの母親であろう。早すぎる妊娠と結婚，そして離婚，再婚を繰り返し，やがて薬物に依存し，子育てや経済的自立どころか自身の生活もままならないようになる。

むろん個々人の資質もあるが，この一家3世代の成功と失敗の物語から，アメリカ社会の，そしてアメリカの「夢」の何が読み取れるだろうか。ヴァンスは，「世界一素晴らしく，偉大な国に住んでいる」と1929年生まれの祖父，そしてその3歳年下だった祖母に言われながら育ったと述べる(40)。この祖父母は，粗野で教育も教養もない典型的ヒルビリー労働者であるが「古風で誠実，自立心に満ち，勤勉」で，成功を目指す確固たる倫理観を持ち，第二次大戦後のアメリカ経済の発展とともに社会上昇を遂げた。その一方で1970年代終わりに10代でシングルマザーとなった母親は，ヴァンスのコミュニティの他の多くの住人と同様，両親，そして戦後のアメリカ社会が可能にした中産階級的豊かさを享受して育ちながらも「消費主義的で孤立を深め，怒りと不信感」に満ち溢れ，不都合な現実から目をそむけ，家族の度重なる援助にもかかわらず，まっとうな生活を送ることができないでいる(41)。彼女の両親であるヴァンスの祖父母が，離婚こそしなかったものの若い時には長い年月仲たがいをしており，祖父の飲酒癖も手伝い，ヴァンスの母親やその兄妹らの幼少期に良いロールモデルを示せなかったことも関係しているようだ。一方の孫のヴァンスは，この母親に振り回されながらも，親代わりとなった祖父母の教えのおかげで，アメリカという国とその体制に信頼を置くことできた。それは彼にとって「非常に意味が

あることだった」という[42]。幼少期のヴァンスは「アメリカン・ドリーム」の物質的側面を享受できずとも，その道徳的神話を信じることができたがために，必死で勉強して社会的上昇を目指し，それを成し遂げることができたと言える。

ヴァンスの祖父母は，それが「まるで宗教であるかのように」勤勉さと「アメリカン・ドリーム」を信奉していたという。それは彼らが，富や特権には意味がないという幻想を抱いていたことを意味しないが，勤勉さと努力こそが成功をもたらすものであって，失敗はその人の責任であると考えていた[43]。そしてそれは,「1920年代よりも,そして今日よりもはるかに中流社会」的だった，貧富の差が著しく縮まった1950年代のアメリカにおいて，大きな意味を持つ倫理観だったと言える[44]。それに対し，1961年に生まれた母親はどうだったろうか。貧困率と経済的不平等を示す数値が低下したのは1970年代半ばまでであり，それ以降は数十年にわたり「平等化傾向の反転が始まった」とされている[45]。【グラフ1】でも見たように，大恐慌以降年々減っていっていた最上位1%に位置する人々の富の取り分は，70年代こそ10%前後で推移しているものの，ヴァンスの母が幼子を抱えひとりで自活を始めようとする1980年代になると増加に転じだす。また，親より良い暮らしができるかどうかの可能性を生年別に示した【グラフ2】を，ヴァンス家の祖父母と母の関係を念頭に見直してみると，祖父の世代で90%を超えていたその可能性は，母の年代では60%以下と，30%以上も下がっているのだ。特に貧しく，教育のないヴァンスの母のような労働者階級のシングルマザーが上昇を遂げることは，確かに社会構造的に一世代前よりも格段に難しくなっていたと言える。ヴァンスは，母親をはじめとするコミュニティの経済的落伍者をとりまく，こうした構造的な厳しさに理解を示したうえで，彼ら・彼女らが，自分の人生に対して主体性を持たなくなってしまっていることを問題点として指摘している[46]。こうした人々は，自分の失敗を他者のせいだと責めることはあれ，自分の努力の欠如であるとは考えない。その姿勢は，勤勉を重んじ「アメリカン・ドリーム」を信奉した祖父母たちの倫理観と，強いコントラストを描く。成功しにくくなった社会的な構造が母親らのこうした姿勢を生んだのか，こうした姿勢が格差を増

長する社会構造を強化したのかについては，より慎重な議論と分析が必要となるが，この 2 つが相互に絡み合った問題であるとは言えそうだ。

一方でこうしたヴァンスの母の物語は，必ずしも「アメリカン・ドリーム」の言説がアメリカ全体で有効性を失ったということを意味するわけではない。『ヒルビリー・エレジー』でも，地元産業の衰退によりコミュニティ全体が経済的逆境に置き去りにされる中，勤勉さと努力を持って，より良い人生を切り開いていくさまざまな年代の人々の姿が描かれる。実のところ，「ぼろ着」の貧者が立身出世をする可能性は，実世界ではアメリカ史全体を通じてさほど大きくなかったことが数々の研究で示されてきたが，それでも多くの人々は『ぼろ着のディック』を読み，「アメリカン・ドリーム」を語り続け，「夢」をかなえようと努力をしてきた(47)。立身出世をする人間は，たとえごく少数であってもいつの世にもいたし，「夢」と幸福の達成目標をどこに置くかによって，この言説の有効性も大きく異なってくる。ロックフェラーのような大富豪はもちろん，努力により弁護士，そして投資家となったヴァンス本人が前者の例であるなら，安定した家庭生活を築き，コミュニティでも信頼されているヴァンスの異父姉や叔母などは，後者の好例と言えるだろう。

事実，実社会の経済状況の悪さが「アメリカン・ドリーム」の言説を弱めていたとは考えにくい。第一節で取り上げたように，「アメリカン・ドリーム」の概念自体は古くから存在していたものの，この言葉が一般的に使われるようになったのは，1930 年代になってからである。1930 年代，それは 1929 年の株価大暴落に始まる大不況の真っただ中であった。サンデージによると，1933 年，『アメリカン・ドリーム』という劇がブロードウェイで上演されたが，それは「失業率が 24.9％に達し，19859 もの企業が倒産し，4004 の銀行がつぶれた」年であった(48)。アメリカの人々は，こうした未曽有の厳しい経済状況の中で「夢」を見ようとしたのである。

また恐慌が一種の階層流動性をもたらしたことも，人々がこの時代に「アメリカン・ドリーム」を口にした理由だったかもしれない。これまでのアメリカ社会の中で，「アメリカン・ドリーム」が最も説得力を持ったのは，所

得格差が縮小した20世紀の半ば，経済学者が「大圧縮の時代」（the Great Compression）と呼んだ年代であろう(49)。しかしこの時期のアメリカ社会では，全般的な好景気や産業の発展，ホワイトカラー職業の増加，教育制度の充実などが良い条件の雇用を生み，肉体労働から知的労働への上方移動や，親の世代よりも良い暮らしという「夢」を可能にしてきたのであって，単純に下層から上層へ，あるいはその逆という階級移動があったことを意味しない。富裕層が一夜にして富を失い，銀行が倒産する大恐慌の1930年代こそ，階級が決して固定されたものではないことを人々が思い知った時代である。それだからこそ，自助努力により階級を這い上がろうとする「アメリカン・ドリーム」という概念が光を放ったのではないか。

繰り返しになるが，「アメリカン・ドリーム」には2つの側面があるとされる。勤勉に働き経済的に成功することが物質的神話の体現だとすると，アメリカという国が人々に機会を平等に保障することは，道徳的神話の体現である。格差そのものや，経済的な逆風自体が「アメリカン・ドリーム」の説得力を失わせるものではないことは，第3節および本節で見た通りである。「新しい金ぴか時代」と言われる現代のアメリカ社会において特に問題なのは，その格差が世代間にわたって引き継がれ，固定化されていること，アメリカが階級社会の様相を帯び，クルーグマンの言葉を借りれば，「階級――継承される階級――が生まれつきの才能を左右する切り札になると言っても過言ではない」状態となりつつあることなのではないか(50)。階級が固定化されることで，機会が平等に与えられているという「アメリカン・ドリーム」の道徳的神話は力を失い，一部の特権階級者を除き，物質的な成功はますます困難になってくる。そうした中では，特に低所得層に生まれた人々は勤勉に働くインセンティヴを失いがちである。ヴァンスの母をはじめとする地元コミュニティの多くの住人を自分の人生の傍観者としてしまった原因のひとつを，ここに見いだすことができる(51)。

親より良い暮らしができる可能性が，統計的には50％を切るとされた1980年代半ばに生まれた『ヒルビリー・エレジー』の著者ヴァンスが，2世代前の祖父母からアメリカの夢への信頼を受け継ぎ社会的に成功したことは，21世

紀の「金ぴか時代」における新たな立身出世物語が誕生したことでもある。ヴァンスの物語は人々に希望を与えるものであるのと同時に，勤勉による逆境の打開・成功という「アメリカン・ドリーム」の物質的成功の神話を強化することで，平等性が失われ，階級社会となりつつあるアメリカの現実を覆い隠す側面を持つことも忘れてはならない。

そのことが一番よく分かっているのは，ヴァンス本人であるかもしれない。2017 年，ヴァンスはオハイオに戻り，“Our Ohio Renewal” という非営利団体を創設した。『ヒルビリー・エレジー』でも描かれた，貧困層に深刻な薬物汚染問題に取り組むとともに，質の高い雇用と教育の機会を故郷にもたらそうとする試みである(52)。言い換えるなら，ヴァンスは自身の物質的成功を故郷に還元することで，「アメリカン・ドリーム」の道徳的神話を取り戻し，この 2 者の健全なバランスを保とうとしているのだ。

ここ 10 年ほど，さまざまな新聞記事，論説等が，アメリカ社会に経済格差が広まりつつあることをデータで示し，「アメリカン・ドリーム」が失われてきたことを報じてきたが，これを数量的データのみで理解することには無理があるだろう。アメリカの「夢」は，同時代の経済状況のみで理解できるものではないからだ。それは人々の集合的な「夢」であり神話であるのと同時に，個々人の成功と失敗の物語でもある。ヴァンス家 3 世代の世界とそれぞれの生き様を描写した『ヒルビリー・エレジー』の語りは，「アメリカン・ドリーム」がアメリカ人にとって，またアメリカ社会にとって何を意味するのかを理解する一助となろう。

注

（1） 本稿は 2017 年 12 月 6 日に行われた，国士舘大学政治研究所主催シンポジウム「格差問題を考える」における筆者の発表，「アメリカン・ドリームは死んだのか：『格差』とアメリカ社会」を論文化したものである。当シンポジウム概要については，石見豊，関口博久，砂田恵理加，古坂正人「シンポジウム『格差問題を考える』」国士舘大学政経学部附属政治研究所『政治研究』第 9 号（2017）：97 － 118。

（2） 小林由美『超一極集中社会アメリカの暴走』（新潮社，2017 年），1。

（3） Paul Krugman, *The Conscience of a Liberal*（W.W. Norton, 2007）．ポール・クルーグマン著，三上義一訳『格差は作られた：保守派がアメリカを支配し続けるための呆れた戦略』（早川書房，2008）。

（4） アメリカンセンター・ジャパン HP「米国の歴史と民主主義の基本文書」，Martin Luther King's "I have a Dream" Speech, <https://americancenter japan.com/aboutusa/translations/2368/#enlist>, last accessed 2017/12/28.

（5） 例えば三省堂の英語教科書，*New Crown* では，このキング牧師のスピーチと公民権運動が 1981 年に初めて題材として取り上げられており，現行の中学三年生用の *New Crown 3* にも掲載されている。森住衛，鈴木健「特集：I have a Dream　対談：キング牧師とスピーチ――ことばの力――」in *Teaching English Now* 16（Sanseido, 2009）, 3.

（6） マーシャル・フレディ著，福田敬子訳『マーティン・ルーサー・キング』（岩波書店，2004 年），143。

（7） 辻内鏡人，中條献著『キング牧師――人種の平等と人間愛を求めて』（岩波ジュニア新書，2009 年），117。

（8） 前掲書，108。

（9） アメリカンセンター・ジャパン HP。

（10） Jim Cullen, *The American Dream: A Short History of an Idea that Shaped a Nation*,（Oxford University Press, 2003）, 4. ジェームスは，*Epic of America* を当初 *American Dream* というタイトルにしたがっていたが，編集者のアドバイスによって変更したという。このことから 1931 年の *Epic of America* 出版当時はまだ American Dream という言葉が一般的ではなかったことが分かると，カレンは分析する。*Ibid*.

（11） スコット・A・サンデージ著　鈴木淑美訳『「負け組」のアメリカ史：アメリカン・ドリームを支えた失敗者たち』（青土社，2007 年），330。

（12） Walter R. Fisher, "Reaffirmation and Subversion of the American Dream," *Quarterly Journal of Speech* 59, 1973: 160-167.

（13） *Ibid*., 161-162.

（14） 『オキュパイ！ガゼット』編集部編　肥田美佐子訳『私たちは"99％"だ：ドキュメント　ウォール街を占拠せよ』（岩波書店，2012 年）。

（15） 「金ぴか時代」という語は，マーク・トゥエイン（Mark Twain: 1835-1910）が友人作家ともに出版した小説，*The Gilded Age: A Tale of Today*（1873）によって定着した。

（16） クルーグマン，24。

（17） オットー・L・ベッドマン著　山越邦夫ほか訳『目で見る金ぴか時代の民衆生活：古き良き時代の悲惨な事情』（草風社，1999 年），94。

（18） 2018 年，ゲイツは世界で最も資産を持つ人物 1 位の座をアマゾン創設者のジェフ・ベゾスに譲った。2018 年現在，ゲイツは 970 億ドル，ベゾスは 1600 億ドルの資産を所有するとされる。“Richest People in the World,” CBS News, <https://www.cbsnews.com/pictures/richest-people-in-world-forbes/20/>, last accessed 2018/11/06.

（19） Paul Krugman, “Why We’re in a New Gilded Age,” a book review, *New York Times*, May 8, 2014.

（20） Dorothy Richardson, *The Long Day: The Story of a New York Working Girl*（University of Virginia Press, 1990）．本書は，ニューヨークの女性労働者の生活を描き出した「自伝」として匿名で 1905 年に出版されたが，実際には著者のリチャードソンは医者の娘で *the New York Times* のジャーナリストであった。リチャードソン自身がどの程度労働者として潜入取材を行ったのかは不明なものの，世紀転換期ニューヨークの女性労働者の生活の実情を詳細に描き出したものとして，高い評価を得ている。

（21） 前掲の *The Long Day* では，主人公がニューヨークのデパートに売り子として当初週給 4 ドルで雇われたが，ある程度の経験を積んだのち，同じ店でお茶やコーヒーの新商品紹介係として週に 8 ドルの「高給」を得ている。Richardson, 269.

（22） ベッドマン，94。

（23） 岡田泰男『アメリカ経済史』（慶応義塾出版会，2000 年），155。

（24） 有賀貞『アメリカ史概説』（東京大学出版会，1987 年），214。

（25） 久保文明，砂田一郎他『アメリカ政治』第 3 版（有斐閣アルマ，2017 年），12。

（26） クルーグマン，28-30。

（27） 砂田一郎「『理念の民主政』と『利益の民主政』――アメリカ政党対立の構図」武蔵野大学法学会編『武蔵野法学』第 3 号（2015），65-66。

（28） 同上，66。

（29） ルイス・ハーツ著，有賀貞訳『アメリカ自由主義の伝統』（講談社学術文庫，1994 年）。

（30） ただし，『ぼろ着のディック』は，生活を立て直し自分の稼ぎでアパートを借り，最後には事務員として会計事務所に週 10 ドルという「高給」で正規雇用されるという出世であり，ホームレスの少年が一気に大金持ちになるような成功物語ではない。H. アルジャー『成功物語――ボロ着のディック――』（太陽選書

27，1975 年），232。

（31） Jeanne M. McGlinn and James E. McGlinn, *A Teacher's Guide to the Signet Classics Edition of Horatio Alger, Jr.'s Ragged Dick or, Street Life in New York with the Boot Blacks*（Penguin Group, 2005）, 3.

（32） ハーツ，281，276．政治学者の砂田一郎は，このように「成功の夢」で人々を惹きつけ，階級的利益に反した投票行動をさせることを，「理念の民主政」と呼んでいる。砂田「『理念の民主政』と『利益の民主政』」，63。

（33） ロバート・パットナム著　柴内康文訳『われらの子ども：米国における機会格差の拡大』（創元社，2017），55。

（34） Gallup, "Economy: In U.S., Fewer Believe 'Plenty of Opportunity' to Get Ahead, Similarly, only half say the U.S. economic system is fair," October 25, 2013, <https://news.gallup.com/poll/165584/fewer-believe-plenty-opportu nity-ahead.aspx>, last accessed 2018/11/07.

（35） The Opportunity Insights, <https://opportunityinsights.org/wp-content/uploads/2018/08/Lecture-1.pdf>, last accessed 2018/11/02.

（36） Carol Graham, "Is the American Dream Really Dead?" *The Guardian*, June 20 2017; Raj Chetty, David Grusky, et al., "The Fading American Dream: Trends in Absolute Income Mobility Since 1940", March 2017, the National Bureau of Economic Research, NBER Working Paper No. 22910, Issued in December 2016, Revised in March 2017, <https://www.nber.org/papers/w22910.pdf>, last accessed 2018/11/11.

（37） J. D. Vance, *Hillbilly Elegy: A Memoir of a Family and Culture in Crisis*（Harper Collins, 2016）．邦訳は J. D. ヴァンス著　関根光宏，山田文訳『ヒリビリー・エレジー：アメリカの繁栄から取り残された白人たち』（光文社，2017 年）。

（38） Vance, 237.

（39） *Ibid*., 33.

（40） *Ibid*., 190.

（41） *Ibid*., 148．ただし，本書でヴァンスが再三にわたり指摘するように，中産階級的な経済的豊かさを享受することと，中産階級的な文化価値観を内在化することとは異なる。その意味で，ヴァンスの祖父母と彼らの一族は労働者階級の「ヒルビリー」であり続けた。

（42） *Ibid*., 190.

（43） *Ibid*., 35-36.

（44） クルーグマン，34。

（45） パットナム，45-46。

（46） Vance, 7.

（47） ハーバート・ガットマン著，木下尚一訳『金ぴか時代のアメリカ』（平凡社，1986 年），254；パットナム，53。

（48） サンデージ，330。

（49） Claudia Goldin & Robert Margo, “The Great Compression: The Wage Structure in the United States at Mid-century,” *Quarterly Journal of Economics* 107, issue I (Feburary, 1992): 1-34.

（50） クルーグマン，206。

（51） 本稿では経済格差と「アメリカン・ドリーム」に対する態度の，人種における差異を論じることができなかった。第 4 節で取り上げた『ヒルビリー・エレジー』は，現代の貧しい白人労働者の世界観を映すものであり，黒人および他のマイノリティー・グループの労働者については，また別に考えていく必要がある。キャロル・グラハムによるアンケート調査によれば，黒人をはじめとするマイノリティー労働者は，勤勉に働けば経済的により良い暮らしができるという「アメリカン・ドリーム」を信じる傾向が白人労働者よりも強く，全般的に楽観的な回答をしている。マイノリティーのコミュニティでは，家族，教会等の非公式の社会的セイフティネットが白人コミュニティのそれよりも機能していること，彼らが何世代にもわたり直面してきた人種差別の歴史の中で，経済的，社会的挫折に対する耐性が身についている傾向にあることなどが，その理由として挙げられる。こうした人種・民族的差異については，あらためて別稿で論じたい。Graham, “Is the American Dream Really Dead?”; Carol Graham, *Happiness for All?: Unequal Hopes and Lives in Pursuit of the American Dream* (Princeton University Press, 2017).

（52） 詳細は，Our Ohio Renewal, <http://ourohiorenewal.com/>, last accessed, 2018/11/08.